

平成20年度 国立赤城青少年交流の家 特別事業
青少年自立支援者のための研究交流フォーラム

～体験から学び主体的に人生を生きることをめざす支援～



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立赤城青少年交流の家

巻頭のごあいさつ

国立赤城青少年交流の家 所長

橋川 廣 司



平成二十一年二月十三日(金)から十五日(日)まで二泊三日の日程で開催されました、国立赤城青少年交流の家特別事業「青少年自立支援者のための研究交流フォーラム」には、全国各地から多くの皆様方のご参加をいただきまして、心から感謝をしております。

十八都府県より、定員を二十四名上回る一二四名の方々にお集まりいただきました。昨年度比ではプラス十四名で、「赤城の森からはじまった青少年自立支援の全国ネットワーク」は少しづつではありますが、拡がりつつあるように感じております。

さて、近年の高度情報化や都市化、核家族化、少子・高齢化等の要因により、青少年を取り巻く環境は大きく変化をしております。不登校・ひきこもり・ニート等の非社会的問題行動、家庭内暴力・学校内暴力・少年犯罪等の反社会的問題行動に関連した報道がない日はないと言っても決して過言ではありません。また、平成十八年の障害者自立支援法の施行後、先天的な疾病、発育発達障害等、障害のある方をとりまく環境はどのように変化したでしょうか。教育現場では従来の養護学校・特殊学級から、障害種にとられない特別支援学校・学級制度へと移行しつつある現在、新たに様々な問題や課題が生じてきているのも事実です。様々な要因により社会と上手く関われない、これらの青少年の自立支援を考える時、その支援の場・タイミング・方法等、個々によって様々な支援をする必要があります。

青少年の自立支援に携わる関係者には、支援のための知識や技術をさらに高めることが求められるとともに、教育の分野だけでなく、福祉、臨床心理、精神医療等の関係者が連携し、新しい支援の方法を模索し、総合的な支援活動を展開していくことが求められています。

社会と上手く関われない青少年が、社会の中でより良く、自分らしく生きるためには、彼らの行為・行動の背景にあるものや原因を十分に把握し、状態・課題・発達段階に応じた社会的な支援を行うこと、そして、地域・学校・関係機関が相互に連携を図りながら、支援にあたることが一層重要となってきます。

そこで本研究交流フォーラムは、参加者の皆様がお互いの立場で今日の青少年を取り巻く様々な問題と支援方法について、幅広い観点から研究・協議等を深めていただきたいと思います。プログラムの内容は現代的かつ喫緊の課題を多面的に捉えようと多岐に亘っております。

青少年の自立支援に携わる関係者が、ここ赤城の地で一堂に会することは、この研究交流フォーラムならではの貴重な機会ではなかったかと考えております。3日間におよぶ研究交流フォーラムの成果が、ご参加の皆様方にとって実りある充実したものとなることを、心よりご期待申し上げますとともに、ここ赤城の地から青少年自立支援の全国ネットワークが形成されますことを主催者として祈念申し上げます。

終わりに、この事業の運営及び当事業報告書の作成に当たりまして、後援をいただいた皆様方、そして、これまで多くの時間をかけご尽力をいただきました講師や実行委員の皆様方に御礼を申し上げます。巻頭のごあいさつとさせていただきます。



はじめに

社会福祉法人 青葉仁会 理事長

柳原典俊



青少年の自立を考えるフォーラム、第二回を無事開催することができました。これも快く講演を引き受けてくださいました講師の方々をはじめ、日本全国から駆けつけてくださり、また熱心な討議にご参加いただいた、皆様がたの力の賜物によるものと実行委員会を代表してひとえに感謝申し上げます。

ひと口に自立と言っても教育と発達、反社会問題、障害における自立など実に幅広く、そして奥深いものがあります。しかし今日そのいずれの部分においても青少年の将来、あるいは日本の未来を考える時、見過ごしてできない問題や課題に満ちていることを感じます。

日本は世界でも有数の豊かな国になりました。それは経済だけではありません。生活は電化され、労せずとも炊事から風呂まで難なくこなすことができます。確かに便利になったと思います。それがあまりにも当たりまえの世の中になりました。たとえ電気釜ひとつ欠いても、今やかなりの不便を感じることでしよう。しかし簡易であることがあまりにも当たりまえになった日常生活のなかで、人間関係までが簡易になってしまったこと、また、一昔前を知らない青少年にとっては、もはや便利になったという心は失せていると言っても過言ではありません。もし電気が止まれば、機械化生活ができなくなれば、友達を失えば、それがメディアなどにより放送されたり、いつ現実になってもおかしくないと思うと、耐える、努力、工夫、克己することなく、それだけで不安になり、なすすべを知らない状況に陥る青少年が少なくありません。便利にたいする感謝の気持ちも信頼するべき友もなく、残るのはただ不安だけです。

また、平和であること、これ以上素晴らしいことはありません。太平洋戦争が終わって63年、日本は戦争を知りません。この状況は諸外国においてもずば抜けています。親が戦争で死ぬこともなければ、世界的にみても長寿国です。自分が戦場という死の局面に遭遇することもなければ、親は高齢死するから子供は大変、が当たりまえの社会感覚となっています。家族の生命環境に恵まれながら、幸福感に満たされることなく家族の絆は薄くなっています。青少年にとって理解できることは、単に依存して生きることか、生命観を持ってないことによる孤独感が蔓延している、と言っても過言ではありません。

このような状況は、青少年の自立と言っても体験、あるいは経験不足により如何にすべきかという概念や、目標が見えにくい社会構造になってきているのではと危惧されます。またそのようにしか捕らえようのない事件や現象なども社会問題化しています。勿論これらのことが全てではありません。障害の問題や反社会的行為、救貧の問題もあります。しかし一般論として、このように青少年の自立条件を欠く社会にあっては、不足条件を補う支援がなければ自立といっても困難な社会状況にある時代かも知れません。そのようなことを踏まえ、自立支援ということ、青少年育成の基本的な課題として特別に協議するのが本フォーラムだと言えます。第二回の開催に際し準備、当日のお世話を下さいました方々の労に心より感謝申し上げます。



青少年自立支援者のための研究交流フォーラム プログラム



■ 2月13日 (金)

18:30 開講式

橋川廣司 (国立赤城青少年交流の家所長)
 榎原典俊氏 (社会福祉法人青葉仁会理事長)

19:00 オープニングセッション

「岩手・宮城内陸地震の被災体験から学んだ自立とは」

～主体的に生きることの大切さ～

佐々木豊志氏 (くりこま高原自然学校 校長)
 西村仁志氏 (同志社大学大学院総合政策科学研究科准教授)

■ 2月14日 (土)

9:15 分科会 I

①一般青少年の育成・発達支援について
 「自立心を伸ばす体験学習・環境づくり
 ～モンテッソーリ教育法から～」

三谷嘉明氏 (めぐみ生涯発達支援研究所 主任研究員)
 穴澤剛行氏 (ふるさと自然塾 代表)

②プロジェクトアドベンチャーについて
 「人と人の信頼関係づくりに着目して」

林 壽夫氏
 (株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン 代表)

③反社会的問題行動の理解と支援

馬場明子氏 (前橋少年鑑別所 所長)
 佐藤順子氏 (元法務教官、(有) ネイチャーワークス
 シニアファシリテータ)

④知的・発達障害(児)者への支援
 「TEACCHプログラムを参考に支援を考える」

小林信篤氏 (川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科准教授)
 山田智子氏 (群馬県自閉症協会会長 臨床発達心理士)

⑤自然体験施設・社会教育施設における支援
 「支援をする自然体験施設の運営を考える」

西田真哉氏 (トヨタ白川郷自然学校 学校長)
 佐々木豊志氏 (くりこま高原自然学校 校長)

14:00 分科会Ⅱ

- ①学校教育における取組と臨床心理学の視点からの検証 宮川治樹氏（帝塚山大学心理福祉学部心理学科准教授）
佐々木克典氏（学校法人白根開善学校 常務理事）
- ②不登校・ひきこもり・ニートの理解と支援 鈴木基司氏（みどりクリニック 院長）
木村元思氏（社団法人葛巻町畜産開発公社ふれあい交流室室長）
- ③食育について
「今なぜ食育か ～豊かな人間性を育む食育を考える～」 黛徳男氏（アドベンチャー集団Do! 代表）
- ④知的・発達障害(児)者への総合的な支援活動
「ネットワークづくりに着目して」 安田淑美氏（群馬県発達障害者支援センター所長・臨床心理士）
山田智子氏（群馬県自閉症協会会長・臨床発達心理士）
- ⑤自然体験活動の効果測定・評価について
「自然体験活動の効果測定・評価」 山下雅彦氏（福山平成大学福祉健康学部健康スポーツ科学科講師）
北川健司氏（NPO法人エヌエスネット理事長）
迫 俊道氏（大阪商業大学総合経営学部公共経営学科講師）

17:30 活動発表

- ①群馬県自閉症協会 ボランティアサークルあすなる会 ③WPPC木質ペレット推進協議会 古川正司さん（新潟県）
大島朋子さん・石井美どりさん・湯浅みのりさん（群馬県） ④社会福祉法人青葉仁会 中谷徳明さん・木寺乃さん
②富山県立となみ養護学校 教諭 中島哲之さん（富山県） 中永鈴菜さん（奈良県）

18:30 ナイトセッション

穴澤剛行氏（ふるさと自然塾 代表）

■ 2月15日（日）

9:30 全体会（シンポジウム）

榊原典俊氏（社会福祉法人青葉仁会理事長）

（パネリスト）

- 林 壽夫氏（株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン 代表）
佐藤順子氏（元法務教官、(有)ネイチャーワークス シニアファシリテータ）
木村元思氏（社団法人葛巻町畜産開発公社ふれあい交流室室長）
山田智子氏（群馬県自閉症協会会長 臨床発達心理士）
饗庭敏彦氏（桐生市立養護学校 校長）
鎌田文氏（モンテッソーリ教育 AMI）

11:30 ふりかえり・まとめ

宮川治樹氏（帝塚山大学心理福祉学部心理学科准教授）

12:00 閉講式

武井一茂（国立赤城青少年交流の家次長）
榊原典俊氏（社会福祉法人青葉仁会理事長）

オープニングセッション

「岩手・宮城内陸地震の被災体験から学んだ自立とは

～主体的に生きることの大切さ～

くりこま高原自然学校 校長

佐々木豊志氏

同志社大学大学院 総合政策科学研究科 准教授

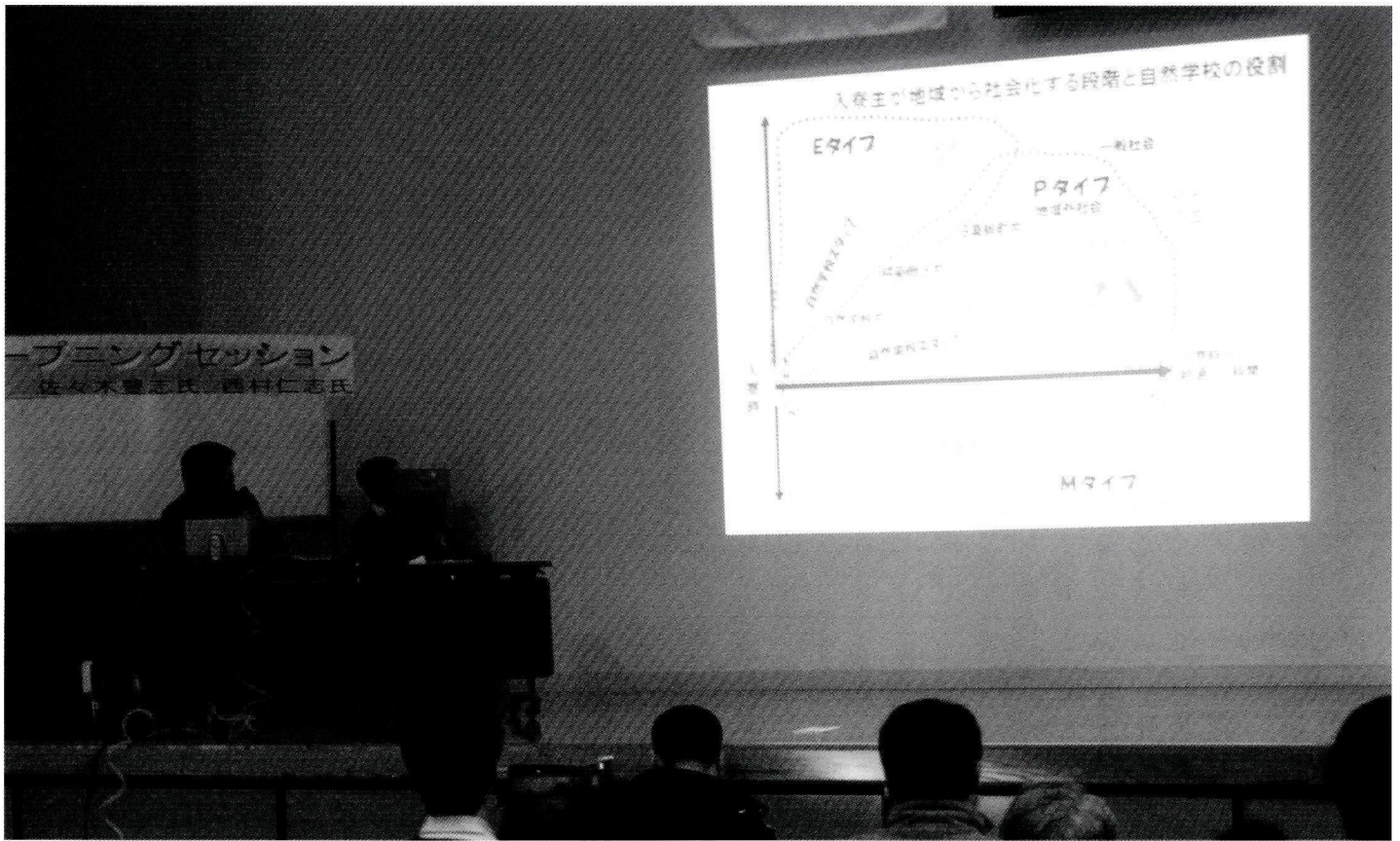
西村仁志氏



二〇〇八年六月十四日宮城、岩手、秋田の三県にまたがる栗駒山山麓を震源に「岩手・宮城内陸地震」が発生しました。このフォーラムの実行委員である佐々木豊志さんが代表を務める「くりこま高原自然学校」は、なかでも最も被害が大きかった宮城県栗原市の耕英地区内にあり、それ以来、地区の住民、自然学校のスタッフ、そして自然学校で生活する寮生たちも、地区からの避難生活を余儀なくされる一方で、再建と復興にむけて歩まざるを得ない状況となつたのです。

佐々木さんはブナの原生林や湿原など豊かな自然に恵まれた栗駒山を舞台に一九九六年以来、子ども達から大人の世代まで、自然体験を通じた教育活動、療育活動を展開し、とりわけ不登校やニート、引きこもりの青年など、自立にあたって支援が必要な青少年に対する取り組みに力を注いでこられました。また耕英地区は、標高六〇〇mの厳しい自然条件のもと、戦後、中国からの引き揚げ者が苦勞して開拓し、暮らしを創ってきた村です。この地区は麓からの道路が崩落し、寸断され、また地区内の家屋も大きな被害を受けました。自然学校も建物の基礎が壊れてしまっています。仮設道路は八月にようやく開通したものの、いまだに避難指示が解除されていない状況にあり、住民達は生活の復興に向けていまだ厳しい状況に置かれています。

この地区では二つの名産品があります。一つは冷涼な気候をいかした高原イチゴ、そして源流だけにすむ幻の魚イワナの養殖です。被災後、仮設道路が開通するまでの二ヶ月はヘリコプターでの一時帰宅でしか行き来ができませんでしたので、イチゴもイワナも危機的な状況にありました。せっかく手塩にかけ



て育ててきたイチゴとイワナをこのままでは、みすみす捨ててしまうことになる。収入の道をたたれてしまうことになるわけです。佐々木さん達は気持ち的にどんどんへこんでいくような状況のなかで「がんばろう耕英」というスローガンを掲げ、復興への活動をスタートさせます。着の身着のまま下山した住民たちの日常生活のクルマでの送迎や、食器が割れ失ってしまった住民に無料でお茶碗を提供する「お茶碗プロジェクト」。そしてヘリでの一時帰宅の間に摘んだイチゴを支援のボランティアと一緒にジャムをつくって瓶詰めし、販売する活動など、外部の支援者からの助けを得ながら、ほんとうにたくさんの方々の活動を展開していったのです。驚くべきことにこうした活動を通じて遅く成長し、仕事に就いた青年たちもいるということです。

今回の被災の体験のなかで、佐々木さん自身、「結果が保証されていないことに一歩踏み出す勇氣」がいかに大切かということを感じ知らされたと言っています。佐々木さん自身は野外教育、冒険教育の専門家であり「常々、自然学校の子ども達には、限界を作るのは自分自身だと言ってきた」のに、こんどは震災の現場で自分自身がまさに同じ状況に立つことになったと感じることになったのです。筋書きのない、将来が保証されない状況のなかで、自然学校の使命を「人と、自然と、社会をつなぎ直す」と定め、地域の人々、栗駒山麓の自然、そして社会システムを射程に入れながら、活動しておられる姿には会場一同あらためて感動しました。

佐々木さんは「さまざまな悩みをかかえた青少年の自立に向けての支援には教育、臨床心理、精神医療それぞれの領域があり、自然学校は教育の領域からアプローチしてきた」と述べています。これらをすべてカバーしようとする自然学校や教育の領域からだけでは不可能です。臨床心理や精神医療の領域の方々との連携や協働が不可欠なのです。このフォーラムから、全国各地でのそのような協働関係が生み出されていくことを願って、オープニングセッションを締めくくりました。

分科会 I

一般の青少年の育成・発達支援

「自立心を伸ばす体験学習・環境づくり」

めぐみ生涯発達支援研究所 主任研究員

三谷 嘉明氏

ふるさと自然塾 代表

穴澤 剛行氏

障害乳幼児通園施設時代に実践していたモンテッソーリ教育を、三谷先生の解釈を加えてお話しをいただきました。先生が初めてモンテッソーリ教育を目の当たりにした時、子どもを自発的かつ能動的な存在にとらえ、子どもは生まれながらに完成しているという児童観にショックを受けたそうです。

先生のお話からモンテッソーリ教育の特徴を以下にまとめました。

1. 等身大の自由の保障
 - ・ 自由はかけがえのない大切なもの。
 - ・ 子どもの等身大の自由を保障するもの。
 - ・ 子どもなりの自由つまりそれぞれの成長期に必要な自由がある。
 - ・ ルソーから受け継いだ自由の思想を、教具を伴う教育法に変えたのがモンテッソーリである。
2. 環境そのものが教師
 - ・ 行動が適切かどうかは環境が教えるので、環境そのものが教師といえる。環境からの自動的なフィードバックによって子どもは自然に学んでいく。
 - ・ 筋運動活動の中でも特に目と手の協応動作を重視した。
3. どのような教具による環境を構成するか
 - ・ 何を教えたいのかが明確になっているか。
 - ・ 一つ一つの教具は特定概念をもっているか。

4. 大から小の積み木を順に積む教具を例にした場合（写真を見せながらの解説）
 - ・ 積み木を積む作業は目と手の誤差を修正する筋運動である。
 - ・ 積み木を綺麗に積めるとすつきりする快感。
 - ・ これによって秩序法則が働く。
 - ・ 積む順序を間違えようと崩れるので、先生が言わなくても教具が即時にフィードバックをくれる。
 - ・ 教師が「それは違うよ」と言った瞬間に子どもは繰り返しをやめてしまう。

5. 環境の中に我々は何を組み込むのか
 - ①（自動化された）フィードバックのある環境
 - ・ そこに自主性↓主体性↓能動↓モチベーションが発現する。
 - ② いかに繰り返させるか
 - ・ 人間の機能獲得のためにいかに繰り返しをさせるか。特に障害児には不可欠。
 - ③ 認知的不協和
 - ・ 「あれ？」がモチベーションにつながる。
 - ・ 不一致を一致させようとする行動が自発する。

- ・ 多くが繰り返しをさせない現状。安心して繰り返させる。
- ・ 自由な活動をどれだけ忍耐強く見守れるか。「やめなさい」「とまりなさい」と否定的、抑圧的な言葉を発している自分に気づく。
- ・ 子どもたちは、何年にもわたって自発的行動をするたびに叱られている。

8. 自己選択の環境を作ることによって自立心が発現する
 - ・ 自由を保障する。安心↓自発性が発現されてくる↓従順になっていく（素直・につきり）
 - ・ 自由↓自己決定↓自己選択↓を許す。
 - ・ ほとんどカリキュラムが決まっていこなしているのが現状↓自然体験プログラムも然り。
 - ・ 自立させようとして自立心を壊している。
9. 雰囲気も含めた環境全体がモンテッソーリの教育法
 - ・ 教具を一つおくと↓教具を使う↓返す↓社会性も身につく↓自己尊重につながる。
 - ・ 散らかり放題の教具が何ヶ月かするときれいに収納されているのが特徴的。
 - ・ 東京うめだ・あけぼの学園ではあたかも大人びた子どもが工場仕事をしている様である。
10. 自立と依存を対立概念をとらえるのが間違い
 - ・ 障害のある人を問題視している現状
 - ・ 「対立↓統合」「分離↓包摂」の関係性の概念にもっていく必要がある。
 - ・ 自立⇄「生きていくことが自体」。生き方の良し悪しを超えた無条件的、無差別的な立脚点に戻らなければ開放されないとどこまできているのが現状。
11. 支援とは
 - ・ 個人のニーズを、社会、政治、経済、物、法律などの環境にマッチングさせるよう調整すること。
 - ・ ライフサイクルを通じて、適切に、連続的に支援する。
7. 環境をどう調整するか
 - ・ 24時間の子どもの環境をどう調整するかが課題。
 - ・ なぜその子が同じ行動を繰り返すのかを考える。（指導の突破口となる）
 - ・ 繰り返しの中に何か求めているものがある。
- 6.モチベーションを高めるには
 - ・ 繰り返しをさせる。
 - ・ 感覚運動によって機能を十分に働かせる。（それ自体おもしろい）
 - ・ 感覚運動によって微調整（コントロール）をさせる。

プロジェクトアドベンチャーについて 「人と人の信頼関係づくりに着目して」

株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン
代表 林 壽夫氏

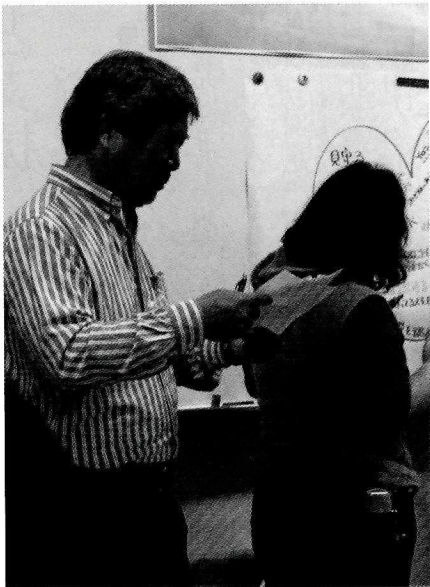
プロジェクトアドベンチャーについての概要説明から始まりました。アドベンチャーとは、「人の器を大きくする」ということ。様々な「気づき」を経て成長する。その「気づき」を得るためにも「信頼関係」が何よりも大切であるということ。プロジェクトアドベンチャーでは、成長するための環境作りとして、信頼関係に着目して、これを育むための手法を研究してきました。

日本での取り組みは宮城県教育委員会が先導的に行なっている。除々に学校教育の中に浸透してきた。そこで、河村茂雄教授が作成した「たのしい学校生活を送るためのアンケート（QU調査）」を行なった。その結果は、プロジェクトアドベンチャーを取り入れている学校では、学校生活の満足度が全国平均を20パーセントも上回るものであった。また、ある特定の学校の例を分析すると、プロジェクトアドベンチャーを継続して実施することでの効果は顕著にあらわれることも判明した。

プロジェクトアドベンチャーのプログラムの構造に関して、アドベンチャーという切り口から説明がありました。人間は生きていく中での「本能」を揺さぶられることで、人と協力して問題を解決していこうという信頼関係が構築される。「切羽詰ると協力しあう」ということを前提に、アドベンチャーで本能を揺さぶる仕掛けになっっている。その仕掛けとして、ピーイングを行なう。ピーイングとは、自分たち自身で行なうルール作りのこ

とで、「お互いに相手を最大限、尊重しよう」という基本概念を具体的に言語化し見えかたにすること。例えば、学校での取り組みの際には、「居心地の良いクラスにするために自分ができること」などを生徒一人一人が書き出していく。「居心地の良さ」は決して先生から与えられるものではなく、自分達で獲得していくものであるという考え方をしている。

今、この研修室にいる人全員でピーイングを体験してみる。まずは、一人一人に紙が渡され、「自分達が安心していられるクラスをつくるために」というテーマのもと、紙の左側に「自分はこんなことができる。こんなことがしたい」、右側に「自分はこんなことをされるのがイヤだな」ということを書き込んでもらう。記入後、回収して、講師が読み上げたものを記録係が模造紙に書き出していく。書かれた内容に関して、疑問や質問を挙げてもらったり、関わった人にサインをしてもまぎまな場面が起こった現象に対して振り返る材料になる。



今回の特徴は、「匿名性」を保つこと。つまり、誰の意見かがわからないようにして、ピーイングを作り上げていく。そうすることで、書いた人の気持ちをみんなで作ったり、特定の人の特別なルールとなることを避けることができる。

「サインをすることに抵抗のある人にはどう対応するのが良いでしょうか？」という質問が参加者から出されると、林氏は、「その場でサインをしなくてもいいのではないかと。納得した時にサインをしてもらうこともできる」と返答。また、「自分はこんなことをされるのはイヤだな、ということとをわざわざ書き出す必要はあるのか」という質問に対しては、「すべてを書き出す必要はないが少しは入れておく。段階を踏んで書き足していくこともできる。」と返答しました。

最後は、実践事例として宮城県で行なっている不登校児対象のアドベンチャーキャンプの様子をスライドを見ながら紹介していただきました。

分科会 I

反社会的問題行動の理解と支援

前橋少年鑑別所 所長

馬場 明子氏

(有)ネイチャーワークス シニアファシリテーター

佐藤 順子氏



● 少年鑑別所とは

● 青少年非行の現状

全国的には、戦後第四のピークを越えたところであり、非行の一般化、集団化、凶悪・粗暴化、低年齢化が特徴。群馬の特徴としては、深刻な状態であり、外国籍の少年が多い、暴走族の影響が強く、低年齢から不良集団に取り込まれている、などである。

● 非行少年の特徴

「やっついいことと悪いことがあいまいになってきている、情緒や社会性が未熟、自信と主体性に乏しく、同調圧力に屈しやすい、自立と自己責任の意識に乏しいなど。」

● 非行少年と家庭の特徴

貧困層、親の指導力不足、親子の交流不足が増加。親から愛されていることへの実感が持てないでいる少年が増えている。(事例紹介)

● ハーシーの統制理論(一九九六年非行から人を遠ざける4つの絆)

- ① アタッチメント
- ② コミットメント
- ③ インボルグメント
- ④ ビリーフ

● 思春期までの子どもに何を学ばせるか

人との関わり、愛情を適切に表現する、感情を言葉で表現させる場面を意識的に作り出し、世代

間ギャップや役割による対立を恐れない、ぶれない姿勢を見せることが大切である。

【質問】

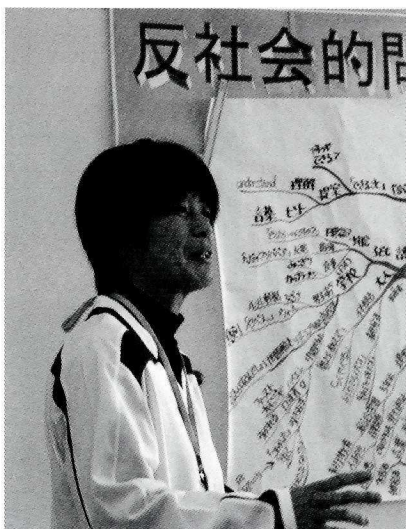
- 少年鑑別所について、詳しく教えて欲しい。
- 矯正教育のやりがいや大変な点とは？

3. 「子どもの言葉から学んでみませんか？」

「少年院のご飯はおいしいけれど、お母さんの作ったカップラーメンのほうがいい。」少年院に収容された少年が、面会のときに母親に言った言葉。子どもたちが発する言葉には、彼らの気持ちがたくさん込められていると同時に、大人が何をすべきなのか、ヒントが隠されているのでは。マインドマップを使って、少年院やPA(プロジェクトアドベンチャー)プログラムで、子どもたちが発した言葉を紹介。

4. ふりかえり

現場レベルで、自分たちができることって何だろう？グループでディスカッション。



(I) 講師自己紹介

1. ウォーミングアップ

(2) 互いを知るためのアクティビティー

① Have you ever...でアンケート

② メイク2: 出会ったことのない人と握手+情報交換(名前・生業・参加目的)

③ 他己紹介: ②で最初に出会った人の情報を紹介
参加者: 18名(大学生、小・中・高校教諭、社会教育、専門学校教員、販売業 他)

2. 「反社会的行動の理解と支援」少年非行を中心に」

知的・発達障害（児）者への支援

「TEACCHプログラムを参考に支援を考える」

川崎医療福祉大学医療福祉学部 医療福祉学科

准教授

小林 信篤氏

群馬県自閉症協会 会長 臨床発達心理士

山田 智子氏



自閉を中核とした発達障害児者の自立を支える支援のあり方は、彼らを取りまく保護者・支援者にとっては喫緊の課題となっている。この分科会ではアメリカのノースカロライナで実践されたTEACCHプログラム (Treatment and Education of Abnormal and related Communication handicapped Children) に関心を持つ保護者・学校及び社会教育関係者・施設等福祉関係者・医療関係者・学生が集った。

分科会の前半は、川崎医療福祉大学の小林氏によるTEACCHプログラムについての基礎的な講義がなされた。

まず、TEACCHプログラムとは、「自閉症スペクトラムの子どもや大人、及び保護者を生涯にわたって包括的に支援する州の制度」であり、手法ではないこと、その理念は「自閉症を単に障害とし捉えるのではなく、多数派の人とは異なった文化を持つ人と理解する（＝違いを認める）」、「彼らを理解した上で支援を構築し、地域で自分らしく自立した生活することを目標としている」ことを確認した。その実践のためにプロとしての支援者に必要なのは、「発想の転換」「強い倫理観を持って常に最高を目指す」「肯定的な視点」「必要なことに焦点を当てて実践する」「将来を見通した支援」であることを、今日の学校教育の現場などの課題の具体例

も交えて学んだ。「徹底的に理解することで徹底的に支援できる」という理念を支援者は常に胸に刻まねばならないであろう。

後半では、群馬県自閉症協会の山田氏によるワークショップがなされた。

対象者への理解なきまま、ひとつの手法だけに着目して支援を行うとことの落とし穴について各自が考えることを目標とし、「4分割の思考法」で自閉症の人への視覚的支援によるスケジュールの提示と行動の安定の因果関係について検討した。また、集計作業で作業する人に必要な支援のある場合（色分けされている・表に貼り付けるだけで集計できる）と、ない場合（情報が整理されておらず、いちいち尋ねないと分類ができない）の作業のしやすさの違いを参加者の代表が体験し、自立を促すファクター、エンプワメントのあり方について実際の場面で考える体験であった。



参加者のアンケートより抜粋「小林先生の講義は鋭い視点からよく整理されていて、大変勉強になりました。ついつい笑わされるシーンもあったのですが、その笑いが自らに向けられている所もあったと自戒しています（高校教諭）」「手探りでかわり、その中で道筋を見つけたかと思っていた折、まさに求めていたものでした。とても感動しました（保護者）」「様々な事例をもとに難しい話を分りやすく聞くことができて良かったです。自閉症の人にとどのように接したら良いかをつかめました（大学生）」

「学校の現場では視覚的支援によるスケジュールの提示そのものが教育の目的になっている雰囲気。教育の原点に立ち返るときと思いました（特別支援学校教諭）」「分りやすく良い内容だったが、盛り沢山で時間が足りないのが残念だった。それぞれの先生がもつと時間をかけてゆつくり事例を交えてお話をきければ良かった（保健師）」

参加者の立場がさまざまだったが、TEACCHプログラムの理念をそれぞれの立場で生かし、実践し、さらに深めるための契機になったと思われる。参加者の姿勢は真摯で意欲的であった。この出会いをそれぞれの立場で生かし、新たな取り組みをまた確認しあえれば、自閉症スペクトラムを中核とした発達障害の人への理解と支援、ひいては彼らの自立の可能性がまた一歩、向上するのではないか。

分科会 I

「自然体験施設・社会教育施設における支援」

トヨタ白川郷自然学校 学校長

西田 真哉氏

くりこま高原自然学校 校長

佐々木 豊志氏

現在トヨタ白川郷自然学校の校長である西田真哉氏に実践事例を提示していただき、参加者と検討をした。西田氏から出された実践事例は、氏の前職である国立三瓶青少年交流の家で取り組んだ、不登校の生徒の支援と非行の青少年支援の二つの実践事例を紹介。

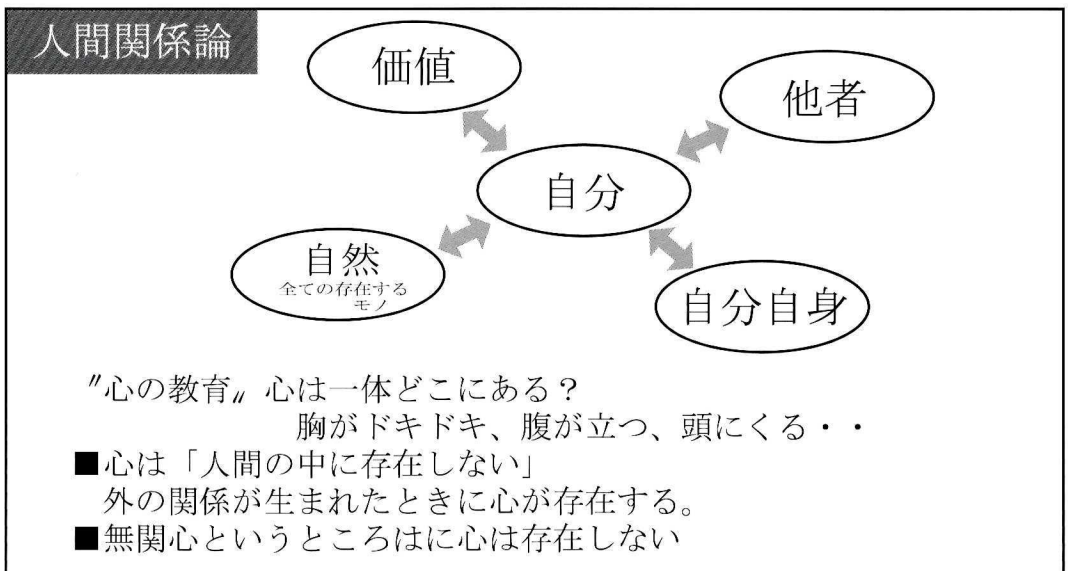
【国立三瓶青少年交流の家の実践事例】

①不登校対応：適応指導教室支援事業 (SAMPe スマイルキャンプⅠⅡⅢ) 平成17年7月、9月、平成18年1月(1泊2日、2泊3日) 後援：島根県教育委員会・太田市、出雲市、江津市各教育委員会。参加は不登校生徒(生徒のみ)親は参加しない。プログラムに選択性を取り入れる。体験学習をベースに振り返りを入れる。学生ボランティアの存在が有効。
 ②非行の青少年対応
 :さんべチャレンジクラブファミリィキャンプ
 平成18年9月1泊2日 主催：松江家庭裁判所
 :SAMPe親子ミーティング(生命の絆)平成19年11月1泊2日
 補導委託者：松江家庭裁判所(少年法25条) 審判前の試験観察中の少年とその家族。家族と一緒に参加することに意義がある。スキンシップ、手を握る。課題を与えて一緒に考えるグループワークの要素を盛り込む。

■参加者で体験学習法の実験を体験。参加者が3名1組になり、バナナを切った断面図を相談して黒板に書く実験。3名で合意形成をしてバナナの断面図を書いた。次に3名で相談して蜘蛛の絵を描く。簡単な作業だが体験から学ぶことの考え方を学んだ。体験学習の実際のと、実施に当たっては体験学習法に基づく展開を大切にしていた事例から、さらにプログラムの見直し、ボランティアの存在、プログラムの選択性、グループ体験をとおして学ぶこと、親子の関わり重視か子どもだけか、心・関わり方の課題など議論された。

両事例に共通の子ども達の自立へつながる人間関係の課題、特に心について議論された。「心はどこにある」という疑問から、以下の関係図で人間関係論を学んだ。自分が対象に関心を持ったときに「心」が生じる。関わりが豊かであることが心が豊かになる。

最後に参加者にこの分科会を振り返ってもらい、この分科会で新たに気がついたこと、発見したこと。そして、帰った後にどんなアクションを起こすのか、紙に書いて全員に発表してもらった。



学校教育における取組と

臨床心理学の視点からの検証

「中高一貫の全寮制教育の取組から」

学校法人白根開善学校 常務理事

佐々木 克典氏

帝塚山大学心理福祉学部心理学 准教授

臨床心理士

宮川 治樹氏

《分科会のねらい》

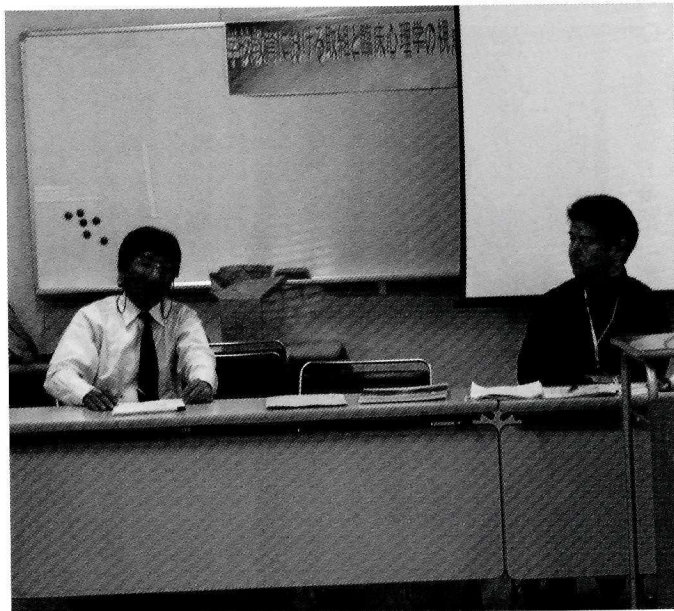
昭和53年の開校以来、生活と学習を統合した中高一貫の全寮制教育を大自然の中で行っている白根開善学校。その取組から、青少年の自立支援について考えるとともに、学校現場での取組を臨床心理学の視点からその実践を検証し、今後の方向性を考える。

《参加者》

15名（男性11名、女性4名）（大学生3名、法務教官3名、高校教師2名、大学講師2名、PAインストラクター2名、他）

《内容》

はじめに、進行役の宮川氏がこの分科会の開催趣旨と講師、会のすすめ方について簡単に紹介した後、アイスブレイキングを兼ねた体ほぐしと協力ゲームを実施した。その後、参加者全員が簡単な自己紹介とこの分科会に参加した動機について話した。続いて、宮川氏がこれまでの自らの取り組みについて紹介し、最後に、佐々木克典講師が、自身の白根開善学校とのかかわりとその取組について紹介した。



白根開善学校は、創設者の本吉修二氏の「人はみな善くなるう」として「という基本理念の下、「どんな子どもでも受け入れる」方針で昭和53年に設立された。単なる私立学校ではなく、「父母立学校」という考え方で、親もどんな学校行事に参加させる。群馬県の山中にあるが、「山の子」を育てるつもりはない。当初は、更生施設か少年院のように思われていた。子どもたちの規則正しい生活の維持の事を考えて、5学期制で授業を行っている。その子に合った教育の場を与える事が大事であると考えており、「子どもにどこまで深く関わられるか」がテーマになっている。現在、生徒90名、教職員32名。

入学する前には必ず、一週間の体験入学をさせ、生徒自身にやっていけるかを判断させる。伝統行事として一〇〇キロ強歩があり、90人中12名が完走した。自分に挑戦できるから、強歩を嫌という子は居ない。その頑張りを見ると子どもの力を信じられる。生徒一人ひとりを良く見て、やんちゃにはこちらもやんちゃで返せばいい。喧嘩すればいい。覚悟と気迫が大事だと思っている。などの詳しい説明が、歯に衣着せぬ口調で熱っぽく語られた。

いくつかの質疑応答の後、心理臨床家の立場から宮川氏が次のようなコメントをした。子どもたちの可能性を信じて、子どもにも真剣に向き合い、人として当然の姿勢が必要である。「特別な事は何もしない」という考えがむしろ必要だと思える。その意味で、教師として子どもをよく観て深く関わろうとする「覚悟」と「気迫」を持って対応されている事がすばらしいし、子どもたちにもそれは伝わらるだろう。子どもたちの問題の多くは親の側に問題がある。発達障害に関しても、親が子どもの一次的障害を認めないから二次的な障害が深刻化することも多い。早い段階でそれを見極めて対処する事が重要。自閉症に関しても「親には責任は無い」と耳障りのいいことを言う専門家？に注意する必要がある。



分科会Ⅱ

「不登校・ひきこもり・ニートの理解と支援」

みどりクリニック 院長

鈴木基司氏

社団法人葛巻町畜産開発公社 ふれあい交流室
 室長 木村元思氏

今、可能性ある多くの若者が何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、主体的な活動をしないあるいはしたくてもできず混沌とした日々を過ごしている。私達はそのような状態を不登校・引きこもり・ニートと表現している。これは、営利・効率性を追い求める資本主義経済体制等が関係した負の遺産であり、青少年を取りまく家庭や教育にまで大きな影響を及ぼしてきたことを意味している。

こうした状態にある青少年への支援は、教育・心理・医療など分野毎に行われている。

しかし、不登校・引きこもり・ニートという状態はあくまでも表現系であり、その背景にある要因は多様かつ複雑であるが故、被支援者の状態を十分に理解した上でオーダーメイドのサポートが必要なのである。つまり、当状態のきっかけと原因は別にして考える必要がある。

本分科会では、不登校・引きこもり・ニートという状態を医学的視点から理解するとともに、実践事例を参考に適切な支援の在り方について参加者と考える機会とした。

始めに、みどりクリニック 鈴木基司院長より、医学的な観点から当状態を検証していただいた。同氏によると当状態は「不安」という、対象が漠然とした恐れ的情感が、破綻した結果現れることが多いようである。通常ヒトはこの不安を克服し、心身を安定させるために行動する。つまり、不安は人間の

成長を促す重要な要素と考えられている。しかし、それら不安を消化しきれないケースがある。

その一つの例として、ヒトの「自律心」を司る脳と「依存心」を司る脳の未発達がある。ヒトは幼少期より、小さな不安解消の積み重ねによって両者のバランスを保ちながら、あらゆる不安を解消し成長の糧としているが、この2つの脳のいずれかが未発達の場合、不安を解消しきれず、最悪の場合、病（神経症）に至るといえる。私達が不登校・引きこもり・ニートの支援を行う際は常に、被支援者の情動に注意を払い、過度なストレスを与えるものではないか観察しながら①常用行為 ②身体症状 ③精神症状）支援策を講じていかなければならないとの助言をいただいた。

■質問事項

Q1. 両親に精神症状があると不登校になりやすい気がしますが？

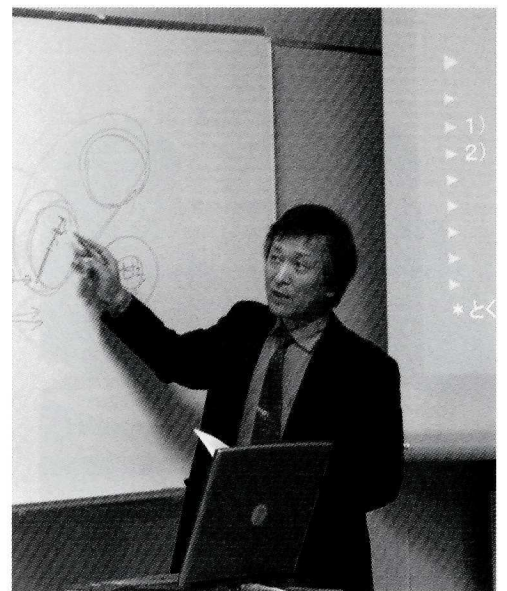
A1. 数値的なものは無いが、家庭環境の悪化が子どもへ過度のストレスを与えているのは間違いない。そのような場合、医療機関では両親の精神治療を行う。

Q2. 不登校・引きこもり・ニートの男女比は？

A2. 男性の方が多い。明確な根拠はない。

Q3. 完璧主義者（青少年）が挫折すると、その後の行動が甘えに見えてしまい、厳しい姿勢でのぞんでいたが逆効果でしょうか？

A3. 逆効果の場合もある。青少年の依存心に課題があるのか自立心に課題があるのか明確にした上で、訴えていることに共感してあげることが大事。



次に、くりこま高原自然学校が行う青少年自立支援活動と（社）葛巻町畜産開発公社が行う山地酪農研修の連携した取り組みが紹介された。くりこま高原自然学校では日常の基本生活を自ら創り出すことを通じて、被支援者の内に秘めた問題を一つ一つ丁寧に抽出し、主体性の育成に重きをおいている。一方、畜産業を中心に6次産業を展開する（社）葛巻町畜産開発公社では、主体性がある程度成熟した青少年に対して、社会復帰へのトレーニングの場（住み込み）を提供している。

不登校・ひきこもり・ニートは個々のケースでその内容や支援策も変わってくる。これまでは、当状態にある青少年の家庭や学校など身の回りの環境改善を図り、さらには医療機関などにおいてカウンセリングによる心の不安解消などが行われてきた。しかし、本分科会の報告から社会活動への完全復帰には、多様な教育、医療機関、企業における実践トレーニングなどを段階的かつ連続的に結びつけていく必要性があることを再確認したと同時に、自然学校と企業の連携による支援の在り方、可能性について気づきを得た有意義な分科会であった。

「食育について」

～なぜ食育か？豊かな人間性を
育む食育を考える～

アドベンチャー集団D.O.！代表

黛 徳男氏

■屋根付広場に移動し、13名が二つのグループに分れて実際に料理をした。地粉文化がある群馬の郷土料理「たらし焼き」をつくるという課題。群馬は粉文化があり、おやつ代わりに畑仕事や山仕事の合間食していたという。上州地粉の小麦粉にいろいろなものを混ぜて焼くというもの。今回は、チリメンジャコ、白菜、フキノトウ、味噌、チョコレート（バレンタインデイなので）などを具として用意された。

特に細かい指示はなく、後で黛氏は、食事を協働で作ること自体が、お互いの距離を縮めるアイスブレイクだという。だから特に細かい指示を出さずに参加者が自発的に「ああだ、こうだ」と始まった。この日は風が強く、火の加減が難しい状況だったが何とか両チームとも協力美味しい「たらし焼き」ができた。カマドで薪で火をたいたが、ペレットストーブも一台威力を発揮した。

■片付けの後、部屋に入り、黛氏の進行で「食育」のデイスカッションをした。

黛氏が主宰している榛名湖で実施している子どもものキャンプを通じて「食べること」の重要性に気がついた。不登校の子ども達も参加するキャンプは食べることからキャンプが始まるという。薪割り、火おこし、無言から始まるがその後話し合いが始まる。不登校の家庭の傾向、自分が起きたときに家族はいない、孤食が多い。ジャンクフードも多い。一人であると食生活が乱れる。ジュースを大量摂取。食



べることを大人はもっと大切に考えなければならぬ。外食産業を含め何を食べればよいのか？国産・無農薬。安全な食材は？子ども達は化学調味料に慣らされている。「いただきます」「ごちそうさま」を言っていない子が多くなっている。食事づくりを手伝う子どもが少ない。家に包丁がない家庭。親子でやると全部親がやってしまう。「手塩にかける」ことの大切さ。〇一五七問題、生野菜を給食に出さない過敏に反応。子どもに手を洗わせるな！「手づかみのすすめ」腸在菌がバリアーとなって雑菌が入り込まない。抗菌など清潔にし過ぎる。思いやり、気持ちを入れて食事を作る大切さ。楽しいことを思いながら大根おろしをすると甘くなる。嫌なことを意識が及ぼすことが食事づくりにはある。・・・など、黛氏がキャンプで取り組む食のあり方から、食育の課題について話された。

■その後、参加者から質疑応答

Q：キャンプで分量が多く食べ残した場合どうしているか？

A：次の食事に工夫して使う、たとえばご飯はリゾットなど。子ども達にちよつと競争心をあおり全員が少しづつ食べて全部食べたこともある。

Q：食育を学校でするのが難しい、親に向けてどのようになげかけるのか、食育の適時は？

A：幼い時期のほうが効果がある。味覚を感じる味ライ細胞はおよそ10歳前後で完成されるといふ。それまでにどんな味を体験するのが大切になる。「ホヤ」には全ての味覚があるという。甘い、すっぱい、しょっぱい、苦い、ウマミ。苦味は大人の味。ホヤが好きな人は好き嫌いが無いのではないか・・・。生理的に苦味は「毒」の信号。

食生活のリズムも大切。睡眠・運動・食事のサイクル。食に関わる様々な話題から「食育」の大切さ、あり方を確認した分科会でした。



分科会II

知的・発達障害（児）者への総合的な支援

「ネットワーキングづくりに着目して」

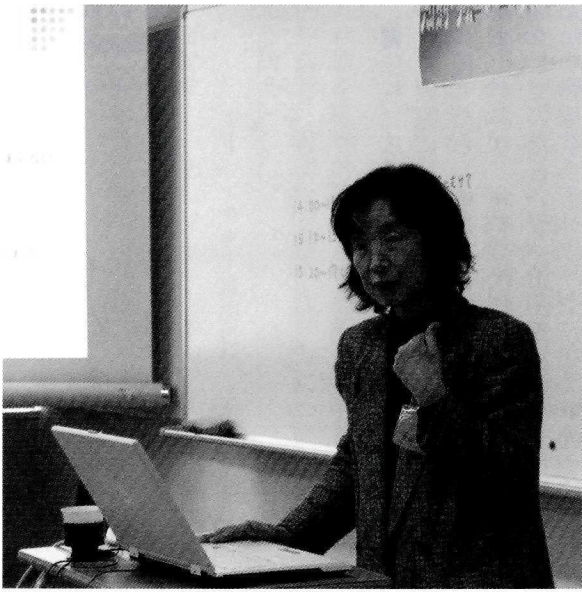
群馬県発達障害者支援センター 所長
 臨床心理士

安田 淑美氏

群馬県自閉症協会 会長
 臨床発達心理士

山田 智子氏

全国の小中学校に在籍する発達障害児と思われる児童生徒の割合が6・3%（特別支援学校・小中学校の支援学級に在籍する児童生徒を除く）であると、二〇〇二年度の文部科学省の調査で報告された。群馬県内にも知的障害が無いケースだけでも、一五、八九〇人の発達障害の児童生徒がいる可能性となる。この人数に加え知的障害を伴う児童生徒もいる。これだけ支援を必要としている人がいるのにもかかわらず、理解と支援のシステムが十分に構築されていないのが、今日の現状であり、解決しなくてはならない課題である。



前半は、群馬県発達障害者支援センター所長安田氏からの講義「発達障害の理解と現状にむけて」がなされた。

発達障害の出現率は10%の可能性も否定できない。検診などで障害が発見できずに社会的適応を促すための適切な支援を受けられなかった場合、二次障害（不登校・非行・ひきこもり・精神症状等）の悪化に繋がってしまっている。具体的な課題としては、アスペルガー障害の成人期における就職は、知的な能力に相反して認知、身体特性、社会性のハンディが大きいかかわらず、理解と支援が不十分なのが現状である。支援にあたっては、ひとりひとりの「自閉症」への理解に基づいた支援が必要不可欠である。これは、小林氏のTEACCプログラムに関する講義で語られたことと同じであり、今回、知的・発達障害者への支援の根本が「理解する姿勢」であることが再認識された。

今後の課題としては、ネットワーキングの構築に向けて、

- ① 早期発見後の支援体制
- ② 発達の節目ごとのつなぎ
- ③ 個人情報伝達の伝達
- ④ 支援の具体的な方法をどう伝えるか

が重要事項である。既存のネットワークの基盤となる本人と家族への支援システムとして、県内の保健福祉、教育、療育、就労の各関係機関と発達障害者支援センターの関連図と、制度についての説明もなされた。

後半は、山田氏による支援をつなぐためのツールの紹介と、ネットワーキングづくりに着目した支援

についてグループミーティングで検討するワークショップが行われた。

支援をつなぐツールとしては、

- ① 個別支援手帳
- ② サポートブック
- ③ 医療サポートメモリー
- ④ 防災ハンドブック

が紹介された。

ワークショップでは、グループごとに各自が支援にあたっての課題を出し合い、その解決のために、「誰と・どの機関と」「どのように関わることとで解決・改善していくか」の意見を出し合い、表にまとめていく過程を通して、連携のためのネットワーキングを意識したセッションを体験した。

参加者のアンケートより抜粋「楽しく分りやすくてきた（看護師）」「連携の必要性、特に高等学校での支援はまだ不完全で、しっかりした体制を作らなければならぬことも知った。わが子に障害があると知って信じてたくない、発見されたことで将来に弊害があるのでないかと思ったこともあったが、周りが努力することで支援が可能なのと分り、自分の立場で少しでも広げていきたいと思った（保護者・高等学校教諭）」「繁忙期で参加を迷ったが、無理して参加した意味があった。今後、微力ながらネットワーキングの一翼を担いたいと思える会だった（高等学校教諭）」「時間が足りず、もっと解決策を掘り下げたかった（大学生）」

参加者の立場や問題意識が様々であったため、全ての参加者のニーズは満たされなかった感があったが、支援の向上・課題の解決には個への対応だけでなく「ネットワーキング作りと連携」が肝要であり、「自分がどのように発信するか」を、意識し合えたと思われる。

自然体験活動の効果測定・評価について

「自然体験活動の効果測定・評価」

福山平成大学 福祉健康学部 スポーツ科学科
講師 山下 雅彦氏

NPO法人エヌエスネット 理事長

北川 健司氏

大阪商業大学 総合経営学部 公共経営学科

講師

迫 俊道氏

1. 最初に

分科会の内容説明として、体験活動の効果測定の測定方法や事例紹介を通して体験活動指導者と効果測定研究者のコラボレートも目指していることを説明しました。講師紹介の後、参加者の自己紹介と効果測定の取り組みがあれば紹介いただき、講座に期待することもお聞きしました。

その結果、今回の参加者の多くは、効果測定に取り組んでいる方は少なく、体験活動の有効性を認識しているがデータとして持っていない現状から効果測定という手法を知りたい方が多数でした。

2. 「効果測定とは」 山下雅彦氏

効果測定の目的、アンケートの実施の手順を説明いただき、次に実際に効果測定のためにアンケートをとる手法や注意点、既存する各種のアンケート手法の紹介をした。

効果測定の目的として、「目的を達成したか否かを判断する」「継続するか否かを意思決定する」「プログラムの改善内容を明確にする」「プログラムの効果とコストを比較する」「そのプログラ

ムに適用している受講者を明確にする」「社会的な責任を果たす」そして「自己認識を深めたり、自己啓発」することまで至ることが重要と説明した。また、効果測定の具体例として「水辺の指導者講座」「スキー合宿」の2例における効果測定の報告をした。

3. 「長期キャンプの効果測定

：RAC板取冒険キャンプ」北川健司氏

子どもたちの長期キャンプにおける効果測定の事例紹介として、活動内容や河川での活動の安全管理や効果的に体験活動を進めるポイントを、昨年夏の10日間で行われたRAC板取冒険キャンプの内容紹介を通して説明した。体験活動を効果的に進めるには、参加者の対応力や理解を進めつつその度合いに合った体験活動を提供していくことの大切さを具体例で紹介した。

4. 「フローとは」 迫俊道氏

参加者にとっても目新しい言葉、「フロー体験」についてチクセントミハイの研究、フローモデルや用語の説明をした。また、迫氏のこれまでのフロー研究についての説明（インタビュー調査、質問紙調査）など具体的事例の紹介からフロー体験について参加者の理解を深めた。

これまでに実施されてきているフロー体験に関する調査について（ESM）や問題点などの説明もあった。講座の中で、テレビで放映されたフロー体験を理解しやすいDVDも紹介され、参加者は映像からフローについて理解を進めた。

フロー状態にすることが参加者や指導者にとって、とても居心地が良い状態になり体験が進むことも理解できた。

5. 「生理学的測定（客観的）アミラーゼ測定」

山下雅彦氏

アンケート式の効果測定では、どうしても客観的な感情を排除しきれない。それに対してアミラーゼ測定法では、ストレスの生理指標として用いられる、消化酵素の一つである唾液アミラーゼ活性に着目し専用の器械（定価二五、〇〇〇円程度）で客観的に数値を得ることが出来る。これは唾液アミラーゼの分泌は交感神経であることが報告されており、その活性値の変化を観察することで身体的・精神的ストレスを捉えられる可能性があることからつくられた装置だ。

今回は自然環境に恵まれた地域での短期滞在における様々な体験活動の前後における唾液アミラーゼ活性を測定して、主観的ストレスの変化を検証した事例の紹介を受けた。

その後、参加者全員に実際に現在のストレスを装置（唾液マーカー）を使い測定してもらい、ストレスを上げるシートを鏡で反対ののぞきながら線を行く行為をしてもらい、実際に測定値が上がることを体験してもらった。

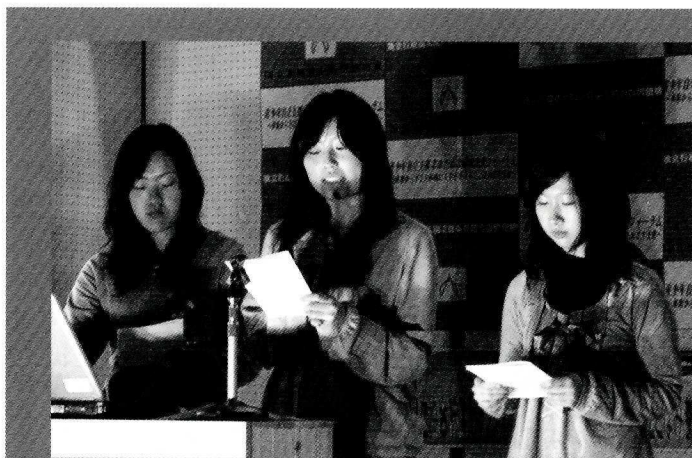
6. 終りに

残り時間の関係で、参加者を4つの小グループに分けて全員が発言のできる振り返りをしてもらい、各グループより振り返りに出た意見を提出していただいた。みなさん学びを進めることは出来たが、子どもたちの効果測定をする際の親の理解や効果測定では測りきれない満足度や問題点についてどう対処するか課題解決などの意見もあった。



玄関ロビーの暖炉横に特設ステージを設置し、青少年の自立のために、様々な領域で様々な支援をされている参加者の取組事例を発表しました。

活動発表



群馬県自閉症協会ボランティアサークルあすなる会
大島 朋子 さん・石井 美どり さん・湯浅 みのり さん

「あすなる会ボランティア活動について」

主な活動として

1. 運動のつどい（体育館・野外の小集団の活動支援）
2. 夏季療育キャンプ・夏合宿
3. 運動会・クリスマス会

年間を通じて活動していくなかで、まわりの方々の支援をえながら、より適切な支援が出来るようになりました。



富山県立となみ養護学校 教諭
中川 哲之 さん

「富山県立となみ養護学校の取り組みについて」

作業学習の基本方針「こかきくけ」の循環

- 「こ」：こころみよう（挑戦）
- 「か」：かながえてみよう（考案）
- 「き」：きづこう（発見）
- 「く」：くろうしょう・くんれんしょう（努力）
- 「け」：けんとうしょう（再考）

上記を循環することで、意欲と能力が高まります。

「秋葉区の住み良いまちづくりについて」

今のライフスタイルに合った方法で里山を利用し、環境の保全が出来るのかをテーマに新しいしくみとして、ペレット燃料の生産・流通・販売を開始しました。

この新しい里山整備がきっかけとなって、「住みたい街づくり」への好循環が生まれ、「秋葉区」が理想の姿に生まれ変わります。



WPPC木質ペレット推進協議会
古川 正司 さん



社会福祉法人 青葉仁会
中谷 徳明 さん・木寺 乃 さん・中永 鈴菜 さん

「森の学校の取り組みについて」

障害の程度を問わず、自然体験プログラムを提供する企画をおこなっています。

TEACCHプログラムを中心とした支援のスキルを見出して、より生活を豊かにする企画「INK」もおこないました。

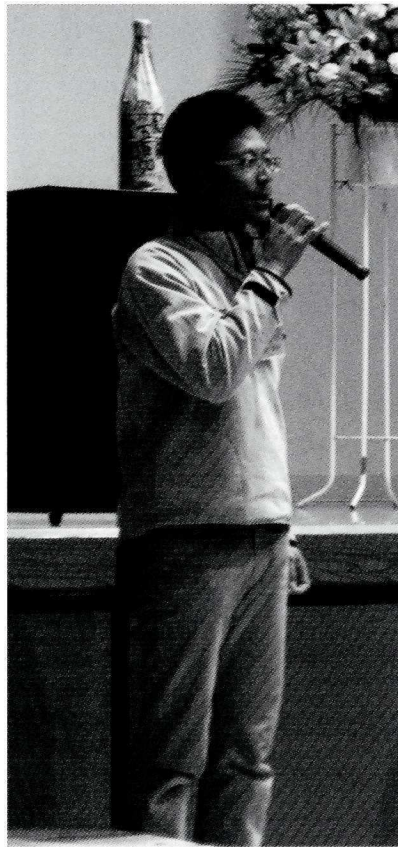
自閉症のイベントを行なうには、参加者の事前情報の収集がとても大切です。

ナイトセッション

「つながる場ここにありません」

ふるさと自然塾 代表

穴澤 剛行 氏



この研究交流フォーラムの根底に流れるテーマである「つながる場」についての説明をしました。フォーラムの随所に仕掛けられたネットワークづくりの場の中でも「腹を割って話すこと」が目的であるナイトセッションでは会場の雰囲気や料理も大切な要因であることから、まずは差し入れをいただいた方の紹介と、講堂の会場セットと料理に尽力をくださった食堂の店長さんにご挨拶をいただきました。

おでん、ロールキャベツとウインナー、ジャンボシユウマイ、チキンナゲット&ポテト、鶏の唐揚げ、焼きそば、にぎり寿司、お蕎麦、ヨーグルトフルーツポンチとポリウムたっぷりの心のこもったおもてなしに会場に和やかな空気が流れ始めたところで、グループづくりにつながるほぐしのゲームを行いました。会場をロープで4分割に仕切り、教育系、福祉系、医療系、学生の4つのコーナーに分れていただきました。福祉系が最も多く、学生、教育系の順に大きなグループができました。続いて会場をロープで2分割して、「どちらかといえはつながりにいて欲しい人」と「どちらかといえはつながりに行きたい人」に分れていただきました。分かれてみると圧倒的に「つながりに行きたい人」が多くいました。お互いのニーズと属性がなんとなく見えたとところでグループピングの方法を説明しました。「つながる場」の仕掛けとして、「ネットワーキング名簿からつながりたい人を探す」「ゲスト・実行委員を取り囲む」

「出会った人とのフイリングで」など自由に動き回ってグループをつくって車座に座っていただきました。グループが固まったところで、実践発表のトップを務めていただいた群馬県自閉症協会の3人の方に乾杯の挨拶をお願いしました。

乾杯後は料理を囲んで歓談タイムとなりました。一つ前のセッションで行われた実践発表では一部の人からの発信だったこともあり、待っていましたとばかりに熱心に話し込む姿が印象的でした。また今年からの試みで、求人マッチングワークショップコーナーを設けた影響で、「うちで働きませんか?」「事業のボラスタ募集」「仕事ありませんか?」「スタツプいりませんか?」などより深いつながり作りのためのコンタクトをとっている方も見受けられました。閉会の20時30分が近づいたところで赤城ボランティアの方々を壇上に招いて赤城のボランティアソングを歌っていただきました。それぞれのグループで話に盛り上がりつつ会場の人々も大合唱となりました。





最終日には前日の全ての分科会の報告を受けた後に全体会「シンポジウム」が開かれた。榊原実行委員長のコーディネートで6名のパネリストに登壇していただき、さまざまな立場の6者の方々の思いを出していただいた。

■林壽夫氏（株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン代表）からは、アドベンチャー体験を通じた自立への環境整備、人と人との関わり方について。

■佐藤順子氏（元法務教官・有限会社ネイチャーワークスシニアアファシリテータ）からは、犯罪など反社会的なことに関わった青少年の支援であるために、元法務教官という「元」と付かなければ、公に話ができない事情があることと、障害者と犯罪者の関係にも言及され、さまざまな領域連携の難しさも指摘された。

■木村元思氏（社団法人葛巻町畜産開発公社ふれあい交流室室長）からは、一次産業が持つ自立支援の環境としての可能性が大であることを話され、一次産業である酪農は多くの専門職が集まりで支援できる可能性があることを強調された。

■山田智子氏（群馬県自閉症協会会長、臨床発達心理士）からは、自閉症は虹の色のようにはつきりとした境界線がないスペクトラムという概念であること。障害のある青少年の支援には環境の調整が必要であり、深い専門性が求められる。

■饗庭敏彦氏（桐生市立養護学校校長）からは、教師の専門性の必要なこと。環境調整という考え方、上手くいっていることを見る「トラウマとリカバリー」

■鎌田文氏（モンテッソーリ教育AMI）爬虫類脳、哺乳類脳、霊長類脳という脳の発達と脳の機能、大脳皮質と関係する自由と責任について。環境が答えを導いてくれるという考え、人間が途中で邪魔をしないことが大切。

昨年はじめて開催されたこの会では、それまでに関わらなかった方々を繋ぐ事で何かが起こるという期待と混沌とした状況だったように記憶している。今回は、最終日のシンポジウムで登壇いただいた方々の立場が違っても、自立支援の取り組みとその方向は一致しているように強く感じた。

コーディネーター 榊原 典俊 氏 （社会福祉法人青葉仁会 理事長）

全体会



最後にシンポジウムを通じて今回のフォーラムの整理と今後の課題が整理された。今後このネットワークで課題として取り組むテーマが以下の5つあげられた。

①環境の問題（自然保護）：多くの自立支援が必要な方は、環境に対して不適応を起している。彼らを取り巻く環境について。

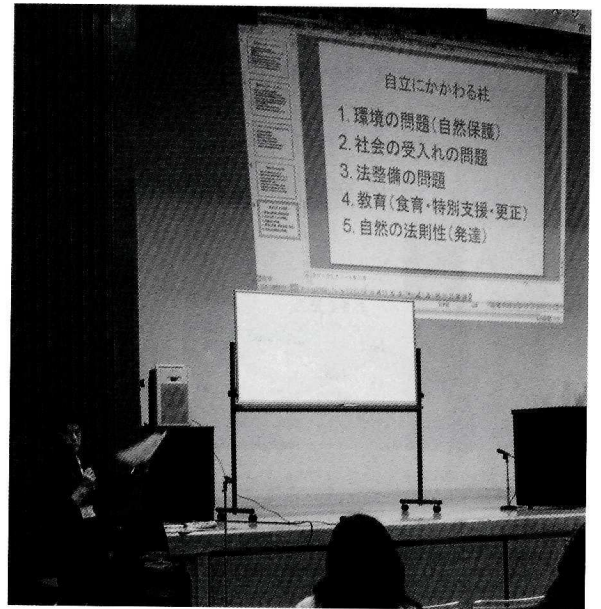
②社会の受入れの問題：社会には十分認識されないことも多い、自立支援が必要な現状と実態をより多くの方々々に理解され、社会全体が自立の支援が必要な人を受け入れる。

③法整備の問題：自立支援法などの国が定める法律にも課題が多く含まれている。法律がより有効に運用、支援されるためにも法整備に関心を集め議論する必要がある。

④教育（食育・特別支援・更生）：自立支援のために様々な教育の方法がある教育の特徴や方法論について。

⑤自然の法則性（発達）：自然の法則や摂理、支援する環境としての自然。発達段階に応じた適切な支援の重要性。

以上の課題を解決するために今後私たちが議論をし、行動し、取り組むことが必要であることを確認した。



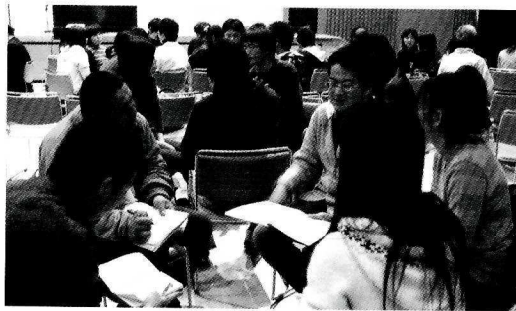
全体会のパネルディスカッション終了後、休憩を挟んで、今回の2泊3日に亘る青少年自立支援者のための研究交流フォーラムでの体験をふりかえる時間を持ちました。

休憩に入る前に司会進行役の宮川氏が、3く5人の小グループでのふりかえりをするので、休憩後に着席する際には、日頃からのかわりの多い人やこのフォーラムと一緒に来た人、以前から知っている人とはなく、このフォーラムに参加して初めて出会った人やまだ話していない人に囲まれて座ってくださいとの案内をしておきました。

先行のパネルディスカッションは非常に中身の濃い充実した内容でしたが、3日間の疲れがはじめてのタイミングに受動的に聞いているだけの時間が長く続くことになったので、多くの参加者の表情に疲れが見え、会場全体の雰囲気も重くなりかけているようでした。そこで、全員で声を出しながら背伸びをしたりして身体を伸ばすこと、大きく頸をまわすことなどの身体活動を行う事によって心身をほぐして気分転換を図りました。これはパネルディスカッションの際に、パネリストの鎌田文氏が説明された脳の構造と機能を前提にした教育方法、すなわち、脳幹と小脳と大脳皮質の総て使うことを必要と考えるモンテッソーリ教育の考え方にも符合するもので、人間が無理なく学んだり効果的な活動を行うために尊重すべき自然の摂理である事を話しました。

ふりかえり・まとめ

宮川 治樹 氏 (帝塚山大学心理福祉学部心理学科 准教授)



そして、体験学習法を重視する立場から言えば、参加者自身が自らの「体験」を「ふりかえる」プロセスが極めて重要であり、「ふりかえり」のプロセスで自ら「気づく」ことによって単なる「体験」が「学び」へと深化すること、各自の「気づき」を他の人と「分かち合う」ことによって、それがさらに深化するとともに、学びの幅が広がることを話し、ふりかえりを開始する心の準備をして、ふりかえりの時間をはじめました。

まず、2月13日の夕方から参加者の皆さんが体験してこられた2泊3日の多様な内容のプログラムを順を追って確認しながら、今回のフォーラムへの関わり、体験、学び、出会いなどについての個人のふりかえりをしていただきました。その後、3く5名程度の人数でグループになっていただき、メンバー全員と名前の自己紹介と握手の交歓をして、小グループでのふりかえりに入りました。

「自分が参加した分科会はどのようなものでした？参加してみようでした？」というお題で、約15分程度グループごとに話し合っていました。

当初、予定した時間を越えても、まだ、話し足りないグループが多くあったので、少し時間を延長する必要があるくらい、積極的に熱の入ったふりかえりが行われていました。最後に、「今回の研究交流フォーラムでの出会いと体験をこれからどう生かしていこうと思いますか？貴方はこれからどのように行動しますか？」というお題でグループごとのふりかえりを行っていた後、数名の方にインタビューをして「ふりかえり・まとめ」の時間を終えました。



ポスターセッション

昼食の時間帯に、参加者は講堂を中心にして、ポスターセッションを行いました。所内随所で熱気が繰り広げられました。



オープニングセッションより



- ・とても良かった。
- ・自然学校について、よくわからない人でもわかくやすく説明して頂きよかった。
- ・これからフォーラムが始まる上で、とても良い導入になった。
- ・被災された話を直接、佐々木さんより聞けたことが良かった。
- ・C-zoneを超えた成長ができればよいと思った。
- ・栗駒の様子を聞いて感動した。

- ・講師のユニークな話が印象でした。
- ・屋外で生きる、生き抜く力を感じた。
- ・とても興味深い話でした。実践の中から生まれる奥深い内容で、感銘を受けた。
- ・勉強になった。可能性は、作るものだと感じた。
- ・実体験でリアルだったので、グッと来た。
- ・栗駒の震災後の状況を知りたかったので、この試みは、大変良かった。

参加者の方々のアンケート

フォーラム終了後に、参加者の方々からアンケートとして色々なご意見・ご感想をお聞きすることができました。一部ですがご紹介します。

- ・自閉症スペクトラムに関する断片的な認識や知識が頭の中で「構築化」されつながってきた気がします。
- ・講義とグループワークがあり良かった。
- ・PAは、なぜ冒険するのか、という素朴な疑問が解決した。
- ・林代表の話を初めて聞けました。人柄がとても良かった。
- ・理論の部分にふれて良かった。
- ・鑑別所のこと、少年非行の実際の様子がよくわかった。



分科会Ⅰより



- ・専門的な話が聞けて良かった。
- ・青少年の育成についてとても深く聞くことができた。
- ・三谷先生の話を聞いて、自分の将来のことを考えさせられ、勉強になった。
- ・モンテッソーリ教育について、知らなかったことが多かったのがよかった。

- ・関わる心が心につながるのだと気づいた。
- ・「人間観」の大切さを考えさせられた。
- ・様々な取り組みについての事例が聞いて参考になった。
- ・心の教育が自立支援にもつながると聞いて、見つめ直そうと思った。

分科会Ⅱより



- ・佐々木克典先生のパワーがすごかった。教育に命をかけているんだと感じた。
- ・自分の考えが深まった。
- ・学校の概念を覆させられました。教育とは、心のつながりだと思いました。
- ・専門的な話が聞けて良かった。
- ・医療専門家からの人間発達とても良い話でした。
- ・栗駒の具体的な話よかったです。脳の話や医療の話は難しかったです。



- ・評価の方法・手法について学習ができて、参考にしたい。
- ・形にする大切さと有効性を学ぶことができた。
- ・垂らし焼をみんなで作り、とまどいはあったが、とても良いアイスブレイクになった。
- ・食育の大切さがわかった。

ポスターセッションより

- ・もっと参加者を募りたい。
- ・体験の様子がよくわかった。
- ・各団体の取り組みがわかりやすく表現していた。
- ・様々な活動をしている人がいると思い、何かしてみようと思意を頂いた。



ナイトセッションより



- ・たくさんの人と交流することができて、ネットワークが広がった。
- ・いろいろな参考になる意見を聞いた。
- ・楽しめた。
- ・充実した時間だった。
- ・この運営が旨くいくようにするのは、かなりの工夫が必要だと思う。
- ・指示されずに自然発生のグループも良いし、緊張感もとれたので良かった。

ふりかえり・まとめより



- ・来て良かった。1つの組織ではなく、多方面から参加しているいろいろな話を聞いた。
- ・活動は、楽しい。
- ・新たな考え方、価値観を知ることができた。
- ・問題意識がもてて良かった。
- ・学びの多い会でした。皆の思いがまた聞けて勇気がわいた。
- ・青少年自立支援という、まだ新しい言葉でしたが、背景を知ることができました。

全体会より

- ・他のグループの内容が聞けたので良かった。
- ・問題意識がもてて良かった。
- ・学びの多い会でした。皆の思いがまた聞けて勇気がわいた。
- ・いろいろな視点からトップレベルの話を聞くことができて良かった。
- ・参加していない分科会の様子を知るためによい時間でした。
- ・会場からの発言もとれると良かった。





2009.2.15 国立赤城青少年交流の家にて



赤城の森で
私たちは、素晴らしい仲間と
最高の時間を共有することが
出来ました。

つながるネットワーク

そしていつの日か
いや、またすぐに
必ず再会することを誓いました。



次年度も皆様のお越しをお待ちしています。
平成20年度担当：企画指導専門職 小野 義孝 ・ 岡部 孝雄 ・ 棚谷 克彦



冒険と創造の森へ

ワクワクとドキドキを
見つけに行こう

百名山に選ばれた赤城山南麓に広がる森林に包まれて、国立赤城青少年交流の家は、みなさまに遊びの場、活動の場を提供して参りました。ここでは自然との出会い、自然の中で他者との出会い、そして新たな自己との出会いが可能です。当施設では環境教育とボランティア活動を柱としてプログラムを提供しています。施設全体のユニバーサルデザインの努力をしつつ、学び、活動をともし、心のバリア、エゴイズムの克服にも努めたく思います。(おそらく我が国初のテントサイトを車椅子のままで行き来できる自然学校には、便利さを持ち込むのではなく、生の自然体験を味わうためにお越し下さい。専門のスタッフ、多彩なサポート、明朗闊達なボランティアがみなさまをお待ちしております。



独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立赤城青少年交流の家

〒371-0101 群馬県勢多郡富士見村赤城山27
TEL 027-289-7224 FAX 027-289-7226
URL <http://akagi.niye.go.jp>

平成21年5月5日に、「富士見村」は「前橋市」に合併します。

新住所：群馬県前橋市富士見町赤城山27

(郵便番号・電話番号の変更はありません。)



国立赤城青少年交流の家では、ご利用の皆様にご覧の「安全・安心」に施設をご利用して頂くために、平成21年秋頃より「宿泊棟」の耐震工事及び、バリアフリー化等の改修工事を予定しています。詳しくはスタッフにお問い合わせ下さい。

